

クローズアップ NGO・NPO

特定非営利活動法人

「飛んでけ!車いす」の会 ～フィードバックを大切に～

活動内容

一九九八年五月に小さな市民活動団体として札幌で始めたこの会は、満一〇年を迎えました。発展途上国に旅行者の手荷物二〇kgの範囲で車いすを一台ずつ届けるといふ活動です。この一〇年で世界六五カ国に一六〇〇台もの車いすを届け、設立当初には思ってもいなかった発展を遂げました。

日本では使われない車いすがあります。子ども用は体のサイズが変わると乗り換えられます。大人用も福祉の制度で、買い換えられます。施設や病院でも処分する車いすがあります。そういう方たちが会に車いすを提供してくれ、今では年間二〇〇台以上の車いすの提供があります。集めた車いすは、整備グループが毎週丁寧に整備、清掃します。中身はほとんど新品と同じくらいになります。座面の張り替えをしたり、三台の車いすから一台に作り直すという「技」もできるようになりました。

「飛んでけ!車いす」の会の特徴の一つは、車いすの届け方です。旅行のついでに現地の方、団体や病院に直接届けていただくのです。重たくてかさばる車いすは大荷物ですが、実際に届けて、使う人からお礼を言われ、笑顔をもらうことで、その大変さも吹っ飛びます。また観光旅行では分からない、その国の社会事情も垣間見ることが出来ます。気軽にできる草の根ボランティアで、私たちは「顔の見える交流」と呼んでいます。



↑車いすはむき出しでも預け入れ可能

事務局には海外と旅行者をつなぐ「コーディネート」チームがあり、旅行者が行く国の団体や個人と連絡を取り、相手の体に合った車いすを選ぶための情報をもらい、受け渡しの調整をしています。やりとりは通常英語ですが、留学生に依頼して、母国語で連絡をお願いすることもあります。

会の設立当初から、札幌通運(株)が、全国からの車いすの集荷や空港までのお届け、事務所の安価提供、整備倉庫の無償提供などで大きな支援をしてくださっています。この支援がなければ年間予算五〇〇万円くらいの小さな団体の活動が、ここまで大きく広がることはなかったでしょう。

年齢層の広い活動

ボランティアベースでの活動ですが、当初から学生主体の活動を続けており、事務局に出入りして仕事をする大半は学生です。イベントも多く開催しており、学生がチームを務め、サポートとして大人がいるという形での運営が定着してきました。そんな中で学生は多くのことを学び、巣立っていきま

(特活)「飛んでけ!車いす」の会

〒060-0005 北海道札幌市中央区北5条西6丁目札幌ビル2F TEL & FAX 011-242-8171

e-mail: tondeke@bz01.plala.or.jp URL: http://business4.plala.or.jp/tondeke/

す。一〇周年記念パーティの時には、今は社会人として活躍しているOBやOGが、遠くは四国からも来てくれました。会の活動が現在の仕事にも活かされていると聞くので、社会に出る前の人材育成の場ともなってきたのです。

整備は退職したシニアの方たちの活躍の場ですが、学生たちが参加する場合もあり、孫と同じくらいの年代の若者たちに丁寧な指導してくれ、若者たちも人生経験豊かな大先輩から、車いす整備以外の処世術なども教わります。

車いすを運んでくださる旅行者の年代も幅広く、小学生を交えた家族、新婚旅行の思い出作り、退職記念旅行、ビジネスのついでや大学のゼミ旅行などで、一〇代から七〇代くらいまでの方たちが参加してくださいます。車いすを何度も運んでいただくリピーターが多いのも特徴でしょうか。最高は一五回の方もおられます。ボランティアはどれもそうでしょう

が、一方通行のものではありません。相手からも学ぶことができます。その体験を通して、また持つていく気持ちになってくだ



↑これで学校に行ける—ガーナのハモンドくん

さるのでしよう。

一〇年の間には

この活動を始めたのは、私がネパール・バングラデシュを訪問し、現地で車いすが不足していると聞いたことから始まります。当時、北海道大学医学部の学生だった代表の柳生一自さんが、サークルの研修旅行の時に車いすを手みやげにインドやベトナムに行った時、預け入れ手荷物としてなら車いすが運べるという体験をしていて、その素敵なノウハウを活かして会を立ち上げました。モノの支援ではありませんが、直接車いすを渡しに行ってもらったので、現地の人もつながることができました。

活動二年目から始めた海外スタディツアーでは、車いすをお届けすると同時に、届いた車いすの様子を尋ねたり、近年はその場で整備も行っています。このツアーは毎年続けており、もう一つの特徴は「障がい者も一緒の旅」ということです。会員の中には障がい者もいますから一緒に行くのは自然ななりゆきでした。ツアーの時には、介助が必要な部分を参加者で分担して行っています。お互い苦労もありますが、障がい者が一緒だからこそ見えてくることもたくさんあります。スタディツアーでは「相手の顔が見える」「一緒に食事する」などで、文化や言葉の違いも乗り越えた交流ができます。

また、二〇〇二年からは、助成金などで、会の活動評価のためにスタッフを派遣して、

ベトナム、タイ、ウズベキスタンでの現地調査や整備を行ってきました。モノを「あげっぱなしにはしない」活動を目指しているからです。今後も、現地で整備や修理ができるノウハウの伝授や身体に合った車いすの選び方などを伝える活動を続けていきたいと思っています。

一〇年間の活動をまとめて、今年本を出版しました。「手から手へ。—飛んでけ!車いす一六〇〇台の笑顔」(共同文化社)と題した本の中では、会の始まりから細かい活動内容、提供者、旅行者、車いす受領者の声、スタディツアーなどもまとめてあります。

「私たちは路上で物乞いをする一五歳の少年を見つけました。重い障がいのため、身動きするのも困難な状況でした。「飛んでけ!車いす」からの車いすを彼に贈り、それが彼の人生を大きく変えたのです。使い始めて数日後、彼は「車いすで動き回れるから、物乞いはしない。もっとまともなことをする」と言ったので、補助金を少しあげて、彼は雑貨屋を始めました。そして学校にも行き、読み書きやコンピュータも学びました。今ではプロジェクトのカウンセラーをするまでに成長し、障がいを持つストリートチルドレンや働く子どもたちに声をかけ、もっとよい生活を目指すよう説得して歩いています。」(バンングラデシュよりの報告—「手から手へ。」より一部抜粋)

このような声を聞くことが活動の推進力になっていきます。

クローズアップ

NGO・NPO

特定非営利活動法人

カンボジア沖縄友好の会 ～カンボジアの高校生に将来を託す 里親奨学金事業～

事業の生い立ち

「貧困のために学校に行けず、途中で脱落する生徒が多い。高学年になるほどそれは増える」カンボジアの教育事情を書いたこの記事が、再起を賭けた「カンボジア沖縄友好の会（COFA）」の進む方向を決めることになりました。

カンボジア沖縄友好の会は、カンボジアから来たサミット医師が沖縄県公衆衛生研究所で実施されたJICAの研修終了後、戦火がいまだくすぶる母国に帰る同氏の活動を支援する目的で一九九〇年に結成された団体でした。支援活動の一環として、COFAはプノンペン市の貧困地域の一角に診療所を建て、医師を含むボランティア医療チームを四回にわたって派遣するなどして小学校と住民を対象に腸内寄生虫駆除活動を展開しました。民間初の国際協力活動として、当時沖縄県内のマスコミでは華々しく報道されました。

当初、活動は「国際ボランティア貯金」や現地日本大使館の「草の根技術協力支援事業」などからの大口の助成金をいただいて展開されましたが、助成期限が切れるとともに資金が枯渇し、活動は停滞を余儀なくされました。遠大な目標、多額の資金需要、ボランティアベースによる人材確保難などが原因として考えられますが、組織の建て直しは助成金に頼らない「身の丈にあった活動」をモットーに模索が行われました。

その中で出会ったのが冒頭の記事でした。

貧しい国ではよくあることですが、子どもは成長するにしたがって家庭を支える働き手として徴用され、教育が犠牲にされます。そのためにカンボジアの将来を担う有為の人材がどれだけ機会を与えられずに失われていくことでしょうか。ポルポト時代の過酷な統治下で多くの知識層が抹殺され、そのため社会各層の人材不足は今なお国家発展の足かせになっているのがカンボジアの現状です。この認識に基づいて、新生COFAは活動の主軸を人材育成に据えることとなり、「里親奨学金事業」が二〇〇五年八月にスタートしました。この時点でCOFAの活動目標は医療協力から人材育成へと大きく転換したのです。

「里親奨学金事業」は、サミット医師の全面的な協力のもと調査、準備に一年間をかけて、骨格がまとまりました。事業を推進するに当たっては、日本側とカンボジア側が人材育成の必要性和献身的使命感を共有していることが不可欠です。日本側が資金を提供し、現地の事業運営はカンボジア側に一任されますが、支援する者にとっては自分たちの献金が適正に使われるための組織運営体制がしっかりしているかどうかが大きな関心事でありました。その意味では日本人の気心を熟知しているサミット医師の存在はCOFAにとってはまたとない幸運であったと言えます。

しかし、新学期が始まる九月を目前にし

(特活) カンボジア沖縄友好の会

〒902-0065 沖縄県那覇市壺屋2-10-10

TEL & FAX 098-832-6575

e-mail : mh-kinjo@nirai.ne.jp

て、思いがけないことが起こりました。サミット氏が心臓発作で急逝したのです。計画はふりだしに戻り、中止も脳裏をかすめる中で、懸命な後継者探しが行われました。幸い、娘婿のラタナー氏が義父の遺志を引き継ぐ決意を固めたことで「事業」は何ごともなかったように予定通りスタートすることができました。ラタナー氏は日本人から空手の指導を受けており、大の親日家であることで会員も安心したものです。

事業の内容

奨学生（里子）はプノンペン市から100km以内の農村地帯にあって、COFAと協力の取決めができている中学校の卒業予定者の中から学業成績、家庭環境を考慮して選抜されます。これまでは年間10人を受け入れてきましたが、里親希望者の増加に伴い、四年目の今年度からは受け入れる里子数を20人に倍増します。COFAの会員は現在90人。「里親会員」と「サポート会員」で構成され、それぞれ年会費一万円、三〇〇〇円を納めていただいています。里親会員には里子一人が割り当てられ、卒業まで三年間の支援を行います。事業の運営経費はサポート会費または寄付金から補填されます。

なぜ高校生を支援するのかというと、厳しい試験制度の中で高校まで進級できる者は、COFAが目指す社会の指導者になれる能力があると判断されるからです。奨学

金八〇ドルは決してゆとりのある額とは言えませんが、貧しい家計にとっては高校進学への負担を軽減するのに少なからず貢献していることは、左記の女生徒の手紙にもうかがい知ることができます。「家庭を助けるため高校進学を諦めかけていましたが、奨学生募集の掲示を見てすぐに飛びついて金的を射止めました。おかげさまで高校進学が叶えられました」



↑水売りをして生活費を稼ぐ高校生

事業の理念

「里親奨学金事業」は高校生の学業支援を通して人材育成を図るとともに、カンボジアと日本（沖縄）の相互理解を促進することを目的としております。相互の交流はあえて顔を見せ合うことを建前としています。支援する人と受ける人同士が相手の顔や生活環境を知ることによって、より心の通った交流が可能になるものと考えられるからです。両者には年二回は手紙や写真のやり取りを奨励しています。また年に一度、希望者を募って里子の村を訪問するツアーも実施しており、感激の対面が行われます。

カンボジアの農村はどれも貧しく、わずかな田畑を耕して五、六人の家族が食べていかなければなりません。農業ができない

乾季（一年の半分）には、父親は出稼ぎに出かけ、その間母親が家事一切を切り盛りするのですが、健康上の理由などで年長の子どもが手助けをしなければならぬ場合も起こります。家族のために学校を諦めなければならぬのが、本人にとっても家族にとっても葛藤に苦しむことになるでしょう。戦争体験のある沖縄の人たちにとって、カンボジアの現状はかつて自分たちが歩んできた苦難の記憶をよみがえらせ、わずかでも支援の手を差し伸べたいという優しい情愛が湧く動機になっているように思われます。

第一期生10人が今年高校卒業を迎え、さらに上級学校への進学を目指しています。が、会員の間では、その支援も考えるべきだとの声も、ふつつつと沸き起こっています。



↑里子の家族と記念写真